

総合的な学習の時間に関する一考察

—— キャリア教育の視点から見た、ドリカムスクールの取り組みより ——

佛教大学大学院教育学研究科修了 青 木 信 一

抄 録

本稿では、A中学校における総合的な学習の時間を活用した、キャリア教育の取り組みに着目し、その取り組みのひとつであるドリカムスクールが、子どものキャリア発達に及ぼす効果や影響を明らかにすることを目的とした。最初に、キャリア教育で育成すべき力である、基礎的・汎用的能力（自己理解・自己管理能力、人間関係形成・社会形成能力、キャリアプランニング能力、課題対応能力）と、中学校学習指導要領に定められている総合的な学習の時間の目標について整理した。次に、総合的な学習の時間を活用したキャリア教育の視点からのドリカムスクールの取り組みは、子どもの基礎的・汎用的能力の育成に効果的なプログラムである、という仮説を立て、事例研究をおこなった。

その結果、ドリカムスクールが効果的なプログラムである、と断定することはできなかった。しかしながら、一般化という観点では、多くの課題が残るものの、ドリカムスクールの取り組みが、子どもの基礎的・汎用的能力の育成に有効な方策のひとつである、ということが本研究により明らかになった。

Key Words：総合的な学習の時間 キャリア教育 基礎的・汎用的能力

はじめに

20世紀後半からの地球規模での国際化やグローバル化は、私達の日常生活に大きな影響を及ぼした。また1990年代半ばから顕著になった知識基盤社会という社会的な構造変化が到来するなか、教育現場においては、確かな学力・豊かな心・健やかな体の調和を重視する、生きる力を育むことがますます重要になっている。一方、子どもをとりまく社会環境の変化や就業構造の多様化は、子ども達の生活や意識を大きく変容させ、従来の進路指導だけでは対応しき

れないニートやフリーターをはじめとするヒトをめぐる深刻な社会問題がクローズアップされるようになってきた。このような時代背景のなか、筆者はA中学校教諭⁽¹⁾として10年間、学校外の実践と積極的に連携した系統的・横断的なキャリア教育の取り組みを進めてきた。その取り組みのひとつが、総合的な学習の時間、全11時間を使い、第1学年対象に実施したドリカムスクールである。

本稿では、「総合的な学習の時間を活用した、キャリア教育の視点からのドリカムスクールは、子どもの基礎的・汎用的能力を育成するのに効果的なプログラムである」という仮説から、基礎

的・汎用的能力を育成する総合的な学習の時間について考察し、今後の課題や展望を明らかにする。

1 基礎的・汎用的能力の育成と、総合的な学習の時間について

キャリア教育という文言が、文部科学行政関連の審議会報告等に初めて公的に登場した平成11年度中教審答申⁽²⁾以降、様々なキャリア教育施策が展開され、ようやく中学校の現場においても、キャリア教育に関する意識や取り組みが定着してきた。平成23年度中教審答申⁽³⁾ではキャリア教育を「一人一人の社会的・職業的自立に向け必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育」と定義づけ、キャリア教育で育成すべき力として基礎的・汎用的能力を掲げている。基礎的・汎用的能力とは包括的な能力概念であり、具体的には、自己理解・自己管理能力、人間関係形成・社会形成能力、キャリアプランニング能力、課題対応能力の4つの能力により構成される⁽⁴⁾。

自己理解・自己管理能力とは、自分ができること・意義を感じること・したいことについて社会との相互関係を保ちつつ、今後の自分自身の可能性を含めた肯定的な理解に基づき、主体的に行動すると同時に、自らの思考や感情を律し、かつ今後の成長のために進んで学ぼうとする力である。

人間関係形成・社会形成能力とは、多様な他者の考えや立場を理解し、相手の意見を聴いて自分の考えを正確に伝えることができるとともに、自分の置かれている状況を受け止め、役割を果たしつつ他者と協力・協同して社会に参画し、今後の社会を積極的に形成することができる力である。

キャリアプランニング能力とは働くことの意義を理解し、自ら果たすべき様々な立場や役割との関連を踏まえて働くことを位置づけ、多様

な生き方に関する様々な情報を適切に取捨選択・活用しながら、自ら主体的に判断してキャリアを形成していく力である。

課題対応能力は、しごとをするうえでの様々な課題を発見・分析し、適切な計画を立ててその課題を処理し、解決することができる力である。

一方、中学校学習指導要領⁽⁵⁾では、総合的な学習の時間の目標を「横断的・総合的な学習や探求的な学習を通して、自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育成するとともに、学び方やものの考え方を身に付け、問題の解決や探究活動に主体的、創造的、協同的に取り組む態度を育て、自己の生き方を考えるようにする」ことを掲げている。よって基礎的・汎用的能力の育成をめざすキャリア教育と、総合的な時間において育てようとする資質や能力及び態度は、深い関わりをもつといえる。

2 ドリカムスクールの実践⁽⁶⁾

(1) A中学校における具体的取り組み

A中学校では、A市学校教育指針⁽⁷⁾やA市教育改革プログラム⁽⁸⁾及び人権教育基本方針⁽⁹⁾等をふまえ、平成17年度より学校教育目標を「一人一人が希望する進路を選択できる能力を培う」と設定し、キャリア教育を学校教育の1つの柱とし、系統・横断・連携という3つの特色をキーワードとして、その取り組みを進めている。公立中学校では、キャリア教育に関わらず多くの活動が、各学級や学年セクトでの取り組みや、各教科担当者による断片的な取り組みに終わってしまうことが多い。そこでA中学校では、校内組織として管理職・生徒指導主事・各学年担当で構成されるキャリア委員会を発足させ、この委員会が中心となり、キャリア教育全体計画や年間指導計画を作成し、学校全体でキャリア教育を推進していく体制を構築

している。

(2) ドリカムスクール指導計画

ドリカムスクールとは「世のなかやしごとについて学び、学んだことをもとに仲間と協力して考え、夢を描いてチャレンジする力を身につけさせるために、社会で活躍する大人との出会いや実社会のしごとの模擬体験をさせる」というプログラムである。具体的には、総合的な学習の時間11時間を使い、ミッション「世のな

かが明るくなり、みんなが楽しめるUSJ（ユニバーサルスタジオジャパン）のアトラクションを開発しよう！」というテーマをもとに、学校外の教育資源との連携により、インタビューや調べ学習、職業講話や協同学習をし、最終的には班ごとにプレゼンテーションをするという活動である。ドリカムスクールの指導計画を図1に示した。

図1 ドリカムスクール指導計画

回	活動内容 (活動場所)	日付	内 容 目標【ちゃんとあじみ】	特に育てたい能力			
				A	B	C	D
	職員研修 (多目的室)	12月	1年生職員対象にドリカムの意義などの職員研修会 講師 キャリアコーディネーター 角野綾子氏				
宿題	インタビュー (地域)	冬休み	「みんなが楽しいと感じるのはどんなこと？」をテーマに各自が3人にインタビューし、インタビューシートを記入		○		
1	職業講話 (体育館)	1/8 5限	「大阪で活躍した企業家に学ぼう」 講師 企業家ミュージアム課長 廣田雅美氏	○		○	
2	協同学習 (各教室)	1/8 6限	班編成（各クラス7～8班）、役割分担決定、 役割分担シート記入		○		○
3	職業講話 (体育館)	1/15 5限	「しごとについて考えよう」 講師 USJ 通訳 堀内千鶴氏	○		○	
4	オリエンテーション (体育館)	1/15 6限	「協同学習やプレゼンについて」 講師 キャリアコーディネーター 角野綾子氏		○		○
宿題	調べ学習 (地域)	放課後	「世のなかが明るくなる、ものごとを調べよう」をテーマに、各自が調べ学習をし、リサーチシートを記入			○	
5	協同学習 (各教室)	1/22 5限	「世のなかが明るくなる、みんなが楽しめるUSJのアトラクションを開発しよう」企業シート記入 インタビューシートとリサーチシートの内容を共有	○	○		○
6	協同学習 (各教室)	1/22 6限	アトラクション開発会議 目標は【ちゃんとあじみ】	○	○		○
7	協同学習 (各教室)	1/27 5限	アトラクション開発会議 プレゼン資料作成	○	○		○
8	協同学習 (各教室)	1/27 6限	アトラクション開発会議 プレゼンリハーサル	○	○	○	○
9	プレゼン (各教室)	2/5 5限	各学級毎でプレゼンテーション大会 学級代表チーム（優秀賞）の選出	○	○	○	○
10	プレゼン (体育館)	2/5 6限	学年全体でプレゼンテーション大会 学年代表チーム（最優秀賞）の決定表彰式	○	○	○	○
11	ふりかえり (格技室)	学年集会	ドリカム総括 アンケートとふりかえりシート記入	○	○	○	○

A：自己理解・自己管理能力 B：人間関係形成・社会形成能力 C：キャリアプランニング能力 D：課題対応能力

(3) キーワードは「ちゃんとあじみ」

ドリカムスクールでは「ちゃんと話をきく」「あいての意見を否定しない」「じぶんの意見を言う」「みんなで協力する」の4つの約束ごとを作り、それぞれの頭文字から「ちゃんとあじみ」をキーワードとし、活動の目標とした。

まずは、1年生職員対象に職員研修会を持ち、本実践の目的や意義、活動の方法や目ざす子ども像について、職員の共通認識や理解をはかった。研修会の企画や運営については、校内組織であるキャリア委員会がイニシアティブをとり、実際の研修や生徒向けのオリエンテーションは、キャリアコーディネーター⁽¹⁰⁾に依頼した。また実践前の導入として、子どもたちには各自がそれぞれ地域に住む3人の人(お年寄り・大人・未成年)にインタビューをし、その内容をインタビューシートにまとめるという課題をあたえた。質問内容は「楽しいと感じるのはどんなことをしている時ですか?」と「またどんなところが楽しいと感じますか?」の2点とした。このような事前取り組みを経て、ドリカムスクールの活動がスタートした。

第1時の活動、職業講話では「大阪で活躍した企業家に学ぼう」をテーマに、企業家ミュージアム⁽¹¹⁾の方をゲストに招き「どんな人を企業家と呼ぶのだろうか?」という導入から、地元大阪出身の企業家である安藤百福(日清食品)や、江崎利一(グリコ)等についての映像や話から、主にチャレンジ精神についてを学んだ。同様に第3時の活動では、USJでアトラクション開発などの通訳をされている方をゲストに招き、USJでアトラクションが実際に完成するまでの誕生話から「しごとについて考えよう」をテーマに、将来社会人として活躍するためには、コミュニケーション能力が不可欠であることや、そのために今できることは何かについてを学んだ。その後「世のなかが明るくなるものごとを調べよう」をテーマに、各自で調

べ学習をし、リサーチシートにまとめるという課題をあたえた。

これらの活動を元に、第5時からミッション「世のなかが明るくなる、みんなが楽しめるUSJのアトラクションを開発しよう!」をテーマに、各学級を6~8班に分けての協同学習がスタートした。各班が、進行まとめ係・タイムキーパー係・記録係・サポーター係に分かれてのアトラクション開発会議では、まずは自分たちが仕上げたインタビューシートとリサーチシートの内容を班で共有する→自分たちが楽しいと思うものやことをテーマにプレスト(頭の体操)をし、出てきたアイデアから企画シートを記入する→プレゼン資料を作成する→プレゼンリハーサル→プレゼン本番という流れをとった。毎回活動の最後には、ふりかえりシートを記入させ、自分の役割を果たせたかどうかの評価や、その原因の分析、次回への改善点を考えさせ、自分自身を内観させた。そして、第7時の活動からは、各班が開発したアトラクションの構想を、他の班や学級に紹介するためのプレゼンテーションの準備に入った。プレゼンテーションの準備については、なかなか時間内だけの活動では終わらず、第8時から第9時までの1週間は、多くの班が放課後に自主的に残って活動をした。

こうして迎えた第9時、まずは各学級毎でのプレゼンテーション大会をおこなった。各班が、学級全体の前に出てきて5分程度のプレゼンをし、最終的には担任と副担任が審査員となり、学級代表チーム(優秀賞)を選出した。第10時では、学年全体でのプレゼンテーション大会をおこない、優秀賞に選ばれた班が学級代表としてプレゼンをした。そしてキャリアコーディネーターが審査員となり、最終的に最優秀賞をひとつ決めた。最優秀賞には「shining Love」というアトラクションを考案した5組2班が受賞した。プレゼン大会は表彰式ま

でやったところで時間がきたため、全体のふりかえりであるドリカムスクール総括やアンケート、ふりかえりシートや感想の記入については、翌日に臨時で学年集会をもち、そのなかでおこなった。

3 ドリカムスクールの考察および成果と課題

(1) 考察

①「ちゃんとあじみ」の実行状況

ドリカムスクール実施前(平成25年12月)と、実施後(平成26年3月)に、第1学年175名を

対象に4件法による「ちゃんとあじみアンケート」を実施した。ドリカムスクール実施前のアンケート結果を図2-1、ドリカムスクール実施後のアンケート結果を図2-2に示した。また実施前と実施後のポジティブ回答(よくできている・まあできている、と答えた回答)の割合の比較を図2-3に示した。

ちゃんとあじみの実行状況について、ドリカムスクール実施後、すべての項目で上昇が見られた。このなかで、「じぶんの意見を言う」については、ドリカムスクール実施前に、すでに8割を超える生徒がポジティブ回答をしている

図2-1 「ちゃんとあじみアンケート」集計(ドリカムスクール実施前)

		回 答	よくできている	まあできている	あまりできてない	全くできていない	無回答等
ちゃんと話を聞く	男	87 50.0	30 17.2	37 21.3	10 5.8	9 5.2	1 0.5
	女	87 50.0	24 13.8	32 18.5	25 14.4	6 3.5	0 0
	全体	174 100.0	54 31.0	69 39.7	35 20.2	15 8.6	1 1.5
あいてを否定しない	男	87 50.0	36 20.9	29 16.7	18 10.3	4 2.3	0 0
	女	87 50.0	20 11.5	41 23.6	21 12.1	5 2.8	0 0
	全体	174 100.0	56 32.4	70 40.3	39 22.4	9 5.1	0 0
じぶんの意見をいう	男	87 50.0	30 17.2	43 24.7	8 4.6	6 3.5	0 0
	女	87 50.0	29 16.7	40 23.0	9 5.2	8 4.6	1 0.5
	全体	174 100.0	59 33.9	83 47.7	17 9.8	14 8.1	1 0.5
みんなで協力する	男	87 50.0	29 16.7	30 17.3	15 8.7	11 6.3	2 1.0
	女	87 50.0	23 13.2	25 14.4	14 8.1	24 13.8	1 0.5
	全体	171 100.0	52 30.4	55 32.2	29 17.2	35 20.2	3 1.5

上段：回答人数（n） 下段：回答率（％）

図2-2 「ちゃんとあじみアンケート」集計 (ドリカムスクール実施後)

		回 答	よくできている	まあできている	あまりできてない	全くできていない	無回答等
ちゃんと話を聞く	男	87 50.0	43 24.9	39 22.4	2 1.1	1 0.5	2 1.1
	女	87 50.0	40 23.1	34 19.5	6 3.4	5 2.9	2 1.1
	全体	174 100.0	83 47.7	73 42.0	8 4.6	6 3.4	4 2.3
あいてを否定しない	男	87 50.0	44 25.4	36 20.7	2 1.1	1 0.5	4 2.3
	女	87 50.0	40 23.0	40 23.0	4 2.3	3 1.7	0 0
	全体	174 100.0	87 48.4	76 43.7	6 3.4	4 2.2	4 2.3
じぶんの意見をいう	男	87 50.0	42 24.2	38 22.9	3 1.7	2 1.1	2 1.1
	女	87 50.0	44 25.1	39 22.8	1 0.5	1 0.5	2 1.1
	全体	174 100.0	86 49.3	77 44.7	4 2.2	3 1.6	4 2.2
みんなで協力する	男	87 50.0	43 24.7	33 19.0	7 4.1	2 1.1	2 1.1
	女	87 50.0	41 23.5	33 19.0	7 4.1	4 2.3	2 1.1
	全体	171 100.0	84 48.2	66 38.0	14 8.2	6 3.4	4 2.2

上段：回答人数 (n) 下段：回答率 (%)

図2-3 ちゃんとあじみアンケート ポジティブ回答の比較

(%)

		実施前	実施後
ちゃんと話を聞く	男	38.5	47.3
	女	32.2	42.6
	全体	70.7	89.9
あいてを否定しない	男	37.6	46.1
	女	35.1	46.0
	全体	72.7	92.1
じぶんの意見を言う	男	42.9	46.1
	女	39.7	47.9
	全体	82.6	94.0
みんなで協力する	男	34.0	43.7
	女	27.6	42.5
	全体	61.6	86.2

ため、伸び率は低くなった。A中学校のこの学年は、元々から比較的スクールカースト⁽¹²⁾が見られず、一人一人が自由に発言できる土壌ができていた。その反面、自由に発言できる温かい土壌があるが故に「ちゃんと話を聞く」や「あいての意見を否定しない」といった側面が育ちきっていない現状があった。今回のドリカムスクール実施により、特にこれらの項目でのポジティブ回答が大きく上昇し、ちゃんとあじみを、子どもたちが意識するようになった、という点では一定の効果が見られたといえる

②ドリカムスクール後の子どもの感想

ドリカムスクール実施後に、子どもたちが書いた感想より、抜粋したものを図3に示した。

③ドリカムスクール後の子どもの様子

ドリカムスクール終了6日後の昼休みに、ある学級でトラブルが発生した。日直の2人が仕事の押し付け合いをし、カッとなったAがBに

暴言を吐き、あまり弁のたたないBがAを蹴り、取っ組み合いになるという、些細なことが発端となったトラブルである。騒ぎを聞いてその場に駆けつけた筆者が、トラブル当事者であるAとBの主張を聞くと

A：確かに暴言は悪いけど、暴力はもっと悪いやろ。謝れや。

B：暴言も暴力やろ。おまえこそ謝れよ。

A：俺ばかり日直の仕事してるし。おまえ全然やってへんやんけ。

B：俺も仕事したし。自分ばかり仕事してるみたいに言うな。ウザイ。

とまさに卵が先か鶏が先か、と双方の主張は平行線状態であった。そこでトラブル時に周りにいた子どもたちに話を聞くと、どうやら周りにいた子どもたちは、トラブルを仲裁せず（トラブル傍観者）、むしろそのお祭り騒ぎを楽しんでいた子ども（トラブル加担者）もいた、とい

図3 「ドリカムスクールを終えての感想」

<p>「ちゃんと話を聞く」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・相手の話を最後まで聞くって大事なことやなあと思った。 ・相手の目を見て、話を聞こうとするようになった。 ・自分の話ばっかしないようにしようと思う。
<p>「あいての意見を否定しない」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・人の意見を否定しないだけで、こんなにも話がまとまりやすくなるのには驚いた。 ・人の良いところを素直に認めてみようと思う。 ・相手によって、自分の先入観から態度を変えないようにしたい。
<p>「じぶんの意見を言う」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・今まで自分ばかり、話していた気がする。 ・多くの人に自分から話しかけてみようと思った。 ・相手が納得するよう、短く話そうと思った。
<p>「みんなで協力する」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・最初、苦手な子と一緒の班になり、嫌やなあと思った。でも協力していくうちに、仲良くて、自分が少し変わった気がする。 ・一から何かを作るには、みんなの意見が必要だし、協力が必要だということがわかった。 ・えらそうにしないようにしよう、と思った。

う実態が浮かびあがってきた。そもそもドリカムスクールを、この6日前に終えたばかりである。そこで学んだちゃんとあじみを、子どもたちが実生活でも実践していれば、トラブル自体が防げた可能性が高い。また周りのギャラリー（トラブル傍観者や加担者）たちの動きも、ドリカムスクール終了時のアンケートのポジティブ回答の割合とリンクしているとは、とうてい思えない。そこで子どもたちに、自分自身をしっかりと内観させるためにも、今回のトラブルを成長のための良い教材のひとつであると考え、筆者は総合的な学習の時間のなかで急遽、今回の事案を取りあげることにした。

筆者：今回のトラブルを、なぜ誰も止めようとしなかったのか？

C（加担者）：あいつらどっちもどっちやから、いじめちがうし。あいつら自業自得やで。

D（傍観者）：面倒なことに巻き込まれるの嫌やし。

筆者：ドリカムスクールの「ちゃんとあじみ、覚えてるか？」

A：①あれって授業のなかで使うもんやろ。

B：②普段いちいち、ちゃんとあじみって覚えてられへんし。

確かに①の発言の通り、ドリカムスクール後に、横断的な学習の取り組みのひとつとして、社会科の授業で、班毎での協同学習をした際に、子どもたちは、ちゃんとあじみのルールを比較的よく守り、効果的な協同学習に取り組むことができた。（地理の授業で、地域の地形図を作ろう、をテーマに5時間の協同学習を実施）換言すれば、あらかじめこちらが作りあげた、ある種バーチャルな空間の中では、子どもたちは、ちゃんとあじみが実践できているということである。しかしながら、②の発言のように、

現段階で子どもたちは、ちゃんとあじみを頭の中で意識するようには、なっているものの、なかなかそれを実生活での行動に移すまでには至っていないということである。

（2）成果や課題

ちゃんとあじみの実行状況アンケート、子どもの感想文、ドリカムスクール後の子どもたちの様子等から、ちゃんとあじみについて、子どもたちは頭の中で意識するようにはなってきたものの、それが具体的な行動にまでは、なかなか繋がりがきいていない現状が浮かびあがってきた。ちゃんとあじみは、キャリア教育で育成したい基礎的・汎用的能力のうちの、特に自己理解・自己管理能力や人間関係形成・社会形成能力と関わりが深い。特に人間関係形成・社会形成能力は「ア. 自己主張の段階→イ. 自分の置かれている状況を受け止めようとする段階→ウ. 自分の考えを伝えようとする段階→エ. 他者の立場や考え方を理解しようとする段階→オ. 他者と協力・協働しようとする段階」へと推移すると考えられている⁽¹³⁾。

子どもたちの多くは、ドリカムスクールの実践を通して、頭の中ではちゃんとあじみを意識するようになってきたという点で、アやイの段階から、ウやエの段階に推移してきたといえる。

では、ドリカムスクールで学んだちゃんとあじみを、普段の学校生活や日常生活の中でどのように生かし、どうしたら具体的な行動へとつながっていくのか、それが今後の課題のひとつである。まずは、日々の学校生活の中で、学びを生かすべき場面があれば、ドリカムスクールで学んだこととのつながりを伝え、その都度、意識させていくことで、より具体的な行動を喚起していくことが大事である。また、家庭や地域、小学校と目ざす子ども像を共有していくこと、そのための積極的なキャリアコーディネーターの活用等も今後の課題のひとつである。

本実践により「総合的な学習の時間を活用した、キャリア教育の視点からのドリカムスクールの取り組みは、子どもの基礎的・汎用的能力の育成に効果的なプログラムである」という仮説を断定することはできなかった。しかしながら、本実践により、多くの子どもがちゃんとあじみを意識するようになってきたという点で「ドリカムスクールは、子どもの基礎的・汎用的能力の育成に有効なプログラムのひとつである」ということが明らかになった。

おわりに

本稿では、新学習指導要領の趣旨を生かし、生きる力を育むためには、キャリア教育の視点から基礎的・汎用的能力の育成に着目した総合的な学習の時間の取り組みをすすめることが不可欠である、という観点から、ドリカムスクールの実践についてまとめた。この取り組みを終えた彼ら175名は、この4ヵ月後、実際に3.5日間の広域型職場体験学習⁽¹⁴⁾に取り組んだ⁽¹⁵⁾。

こういった取り組みを単なるイベントや思い出作りだけで終わらすことなく、本来の趣旨や目的に基づいた系統的で横断的な取り組みへとつなげていくためには、事前・事後の活動の充実をはかることはもちろんのこととして、生徒の成長や変容の評価について、定性的な方策に加え、定量的な方策も積極的に取り入れ、より多様な視点から、指導の改善に生かしていく必要がある。本稿では、それらのアプローチに乏しい感はぬぐえず、これらについては今後の課題としていきたい。

【注】

- (1) 筆者が平成16年4月から平成26年3月まで10年間勤務した公立中学校。筆者は平成26年4月に転勤した。
- (2) 「初等中等教育と高等教育との接続の改善について」、平成11年12月
- (3) 「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」、平成23年1月
- (4) 「中学校キャリア教育の手引き」文部科学省、2001年3月、22頁
- (5) 平成24年度より中学校で全面实施
- (6) NPO法人JAE、キャリアコーディネーター角野綾子氏監修
- (7) 9頁④キャリア教育「児童一人一人の社会的・職業的自立に向け、コミュニケーション能力や自己理解能力・自己管理能力等、それらの基盤となる能力や態度を育成すると共に、勤労観・職業観等を育成する等、児童・生徒の発達の段階に応じた体系的・系統的なキャリア教育を推進するように努める」と規定
- (8) 平成11年度、各界有識者による市教育改革懇話会を設置、平成12年2月「21世紀にはばたくなにわっ子の育成」と題する提言をもとに、平成12年度策定
- (9) 平成11年4月策定、平成17年4月改訂
- (10) カリキュラム開発や連携に関する研修を積み、一定の知識とスキルがあることを認められたキャリア教育の専門家
- (11) 大阪商工会議所創立120周年を記念して開設された、大阪で活躍した企業家をテーマにした博物館
- (12) 現在の日本の学校空間における生徒の間に自然発生する人気の度合いを表わす序列を、コースト制度のような身分制度になぞらえた表現
- (13) 「中学校キャリア教育の手引き」文部科学省、2001年3月、22頁
- (14) 地域密着型でなく、大阪全域にわたり活動する職場体験学習
- (15) 佛教大学大学院紀要教育学研究科篇第42号にて、筆者執筆

【参考文献】

- ・渡辺三枝子『キャリアの心理学』ナカニシヤ出版、2004年
- ・宮崎冴子『キャリア教育 理論と実践・評価』、雇

用問題研究会、2007年

- ・文部科学省『中学校学習指導要領解説総則編』ぎょうせい、2008年
- ・日本キャリア教育学会『キャリアカウンセリングハンドブック』中部日本教育文化会、2006年
- ・文部科学省『中学校キャリア教育の手引き』、2011年3月
- ・国立教育政策研究所『キャリア教育の更なる充実のために』2011年2月
- ・NPO法人JAEパンフレット